

コード No. 23-NPF-003

提出日：令和 6 年 4 月 30 日

「市民交流による東北アジアの平和構築事業」 令和 5 年度報告書

KOREA こどもキャンペーン
事務局：宮西有紀

1. プログラム（事業）の目的

KOREA こどもキャンペーンは、1995 年に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で起きた自然災害の緊急支援のために結成された。団体の目的に、「朝鮮民主主義人民共和国のこどもたちへの持続的支援と、日朝両国の友好親善、21 世紀の東北アジアの平和構築に市民の立場として寄与する」ことを掲げており、この平和構築には対話の姿勢が不可欠で、対話の場としての「市民交流」の機会を増やすこと、そこに北朝鮮を含めていくことが、現状改善の手段と考えている。

2001 年に開始した「南北 코리아 と日本のともだち展」は、「現地の人々との直接的なつながり」という財産を得ることができた。また、2012 年から実施してきた「日朝大学生交流」では、互いの立場に配慮しつつも、この地域の平和な未来をテーマに話し合えるほどの関係性が築かれた。2018 年以降、交流だけでなく学習会なども実施する年間プログラムへと発展していきなかに、参加した学生が、日朝間の課題だけでなく、北東アジアの地域情勢や在日コリアンの存在などに、より広く関心を持つようになり、こうした交流と学びが平和構築に大きく寄与するとの実感を得ている。

本事業は、20 年の活動で得た南北朝鮮の人びととの信頼関係を活かし、国交が正常化されず人や物の往来も途絶えたまま対立関係が続く日朝、分断状況が続く朝鮮半島、そして、在日コリアンへのヘイトクライムが悪化の一途をたどっている日本国内において、子どもたちや若者による交流と学びの場を増やし、市民交流の意義を伝えながら、東アジア各地で平和を願う人々の輪を広げる試みである。そして、市民交流を通じて、国や政府の枠にとらわれない朝鮮半島と日本の共生社会への道筋がつくられることを目指す。

2. 主な活動内容・スケジュール

<南北 코리아 と日本のともだち展ふらす>

- ・オンライン絵画展 11 月 1 日～12 月 10 日
- ・オンラインイベント 11 月 10 日
- ・対面イベント 11 月 25 日

<東アジア大学生ピースフォーラム>

- ・オープンセミナー 7 月
- ・韓国訪問プログラム 8 月
- ・フィールドワーク 5 月（大久保）、6 月（大阪 코리아 タウン）、3 月（京都東九条）
- ・関西招聘プログラム 3 月
- ・オンライン報告会 6 月、9 月、24 年 4 月
- ・オンライン交流会 10 月

月	実施内容
5月	●<u>5/21 入門編フィールドワーク（関東）</u> 場所：東京・大久保エリア コーディネーター・講師：石坂浩一氏（立教大学兼任講師） 参加者：9名（うち学生6名） 訪問先：西新宿（明月館）、歌舞伎町（千山閣跡）、大久保（媽祖廟、ロッテ工場跡、大久保小学校など）、戸山公園（陸軍戸山学校跡）、高麗博物館（希望者）など
6月	●<u>6/4 入門編フィールドワーク（関西）</u> 場所：大阪・生野コリアタウン コーディネーター・講師：李明哲氏（関西学院大学非常勤講師） 参加者：11名（うち学生6名） 訪問先：鶴橋駅、国際市場、御幸森神社、生野コリアタウン、大阪コリアタウン歴史資料館、いくのコーライズパーク お話：「在日二世として、この生野に生まれ語り続けたいこと」安平浩さん（一般社団法人いくのもり） ●<u>6/27 フィールドワーク報告会（オンライン）</u> 参加者：10名（うち学生5名） 内容：東京・大阪のフィールドワークに関する報告と情報交換
7月	●<u>7/28 オープンセミナー「加害の側が平和への道筋をつくるには～ドイツの事例に学ぶ」</u> ゲスト講師：サーラ・スヴェン氏（上智大学国際教養学部教授） 場所：JICA 地球ひろば（東京都新宿区） 参加者：11名（うち学生6名） 内容：講師による講義と参加者の質疑・意見交換
8月	●<u>8/22～28 韓国訪問プログラム「韓国から朝鮮半島を知ろう」</u> コーディネーター・講師：石坂浩一氏（立教大学兼任講師） 参加者：4名（学生3名、NGO 若手スタッフ1名） 訪問先：西大門刑務所、日本大使館（水曜デモ）、一般社団法人オリニオッケドンム、北韓大学院大学（具甲祐教授、学生との交流）、共同通信ソウル支局、植民地歴史博物館、江華島、景福宮、戦争記念館、非武装地帯（臨津閣、烏頭山展望台）など
9月	●<u>9/23 韓国プログラム報告会（オンライン）</u> 参加者：16名（うち学生8名） （※別添資料：JVC 会報誌での報告記事）
10月	●<u>10/31 オンライン交流会</u> 参加者：8名（うち学生5名） 内容：新旧のフォーラム参加者の交流と情報交換
11月	□<u>絵画展「Drawing Hope」@ロサンゼルス（アメリカ）</u> 場所：シャトーギャラリー 主催：ReconcilAsian、American Friends Service Committee、オリニオッケドンム 参加者：今井高樹、筒井由紀子 ■<u>11/1～12/10 南北コリアと日本のともだち展ぶらす「オンライン絵画展：わたしのワクワク体験」</u> 展示数：141点、訪問数：762名、閲覧数：1,722回 朝鮮、韓国、中国朝鮮族、日本、在日コリアンの子どもたちの作品をオンライン掲載。 http://tomodachi10.net/T/gallery23/

	■11/10 南北 코리아 と日本のともだち展ふらす「オンライントーク：いまこそ平和を考える」 参加者数：30 名 内容：オンライン展示会期中行事として、事務局からの 2023 年度の取り組み紹介、共同通信ソウル支局の渡辺夏目記者による韓国から見た朝鮮半島情勢の報告など ■11/25 南北 코리아 と日本のともだち展ふらす「ともだち展の日：あつまれ！ともだち展のなかまたち」 場所：ウェスレーセンター（東京都港区） 来場者数：35 名 内容：国内展（福岡、埼玉、大阪）主催者からの報告、米での絵画展「Drawing Hope」の報告。「ともだち展」への参加経験を持つ卒業生を中心としたつどい
1 月	□1/8～12 絵画展「Drawing Hope」@ベルファスト（北アイルランド） 場所：アルスター大学 主催：Corrymeela、Ulster University、American Friends Service Committee、オリニオックドム
2 月	□2/17～18 南北 코리아 と日本のともだち展大阪展@大阪国際交流センター 主催：南北 코리아 と日本のともだち展大阪展実行委員会、(公財)大阪国際交流センター
3 月	□3/1～31 南北 코리아 と日本のともだち展大阪展@いくのコーライズパーク 主催：同上 ●3/9～10 関西プログラム 9 日：大阪展企画 若者対話「今こそ平和と共生を考える～対話による解決は可能か？」 場所：いくのコーライズパーク（大阪） 企画・進行：宋悟氏（IKUNO・多文化ふらっと）、劉成道氏（코리아 NGO センター） 参加者：25 名（韓国ゲスト 4 名、日本学生 10 名、在日コリアン学生 2 名、中国朝鮮族留学生 1 名、日本福祉大学学生（日本学生 2 名、ミャンマー・中国・ベトナムなどの留学生 6 名）ほか 内容：絵画展観覧、絵画展説明、パレスチナ現地報告、グループディスカッション 10 日：京都フィールドワーク 場所：東九条エリア（京都） 企画：京都大学生フィールドワーク企画チーム（竹田響、三井滉大） ゲスト講師：ナム・スンヒョン氏（京都コリアン生活センター事務局長）、さとう大氏（同スタッフ） 参加者：17 名（韓国ゲスト 4 名、在日コリアン学生 2 名、日本参加者 9 名） 内容：東九条（京都の在日コリアン集住地域）訪問、在日コリアン生活センターエルファでの在日一世のお話、京都福祉まつり訪問
4 月	●4/17 関西プログラム報告会（オンライン） 参加者：15 名（うち学生・若者 10 名） 内容：関西プログラム振り返りと所感の共有

3. 助成を受けた活動の報告（様子がわかる写真等があれば貼付してください）

□2023 年度活動報告

1) 「南北 코리아 と日本のともだち展ふらす」の実施と首都圏におけるネットワークづくり

絵画収集と展示：オンライン絵画展は、スタート時にピョンヤンからの作品が間に合わなかったが、11月末に最新作品11点が無事に届き、追加で掲載することが出来た。中国は参加を見送ったが、韓国からはインターネットでも閲覧があり、多くのメッセージが寄せられた。

対面行事：期間中には、オンライントークイベントのほか、卒業生・支援者・協力者が集う「ともだち展の日」を開催した。ともだち展卒業生が集って旧交をあたため、今後の協力者としての繋がりができ、3月の大阪展や関西プログラムに参加する流れもできた。東京・大阪いずれでも若い世代の人たちが「いまこそ平和を考える」機会となった。

ともだち展／貸出展示：11月にロサンゼルスで開催された絵画展「Drawing Hope」にともだち展実行委員会が協力し、ともだち展所蔵作品が展示された。これは、韓国の尹政権誕生後に南北情勢悪化するなか、韓国パートナー団体オリニオッケドムが海外連帯事業を推進しようと平和・人権問題に取り組むアメリカの団体とともに開催したもので、KOREA こどもキャンペーンの筒井事務局長とJVC今井代表が開幕式に参加した。1月には北アイルランドでも開催された。日本国内では、福岡や大阪、埼玉のほか、埼玉の協力者の紹介で、新たに埼玉県小川町での絵画展が実現した。

ともだち展教材化：過去の作品やメッセージ等を活用した東アジアの平和構築促進を目指す「教材」づくりは、子どもの集う場へのアプローチに苦戦して具現化できなかったものの、協力者の紹介により学童を運営する横浜 YMCA や東京 YMCA につながりができた。

◎オンライン絵画展



11月末には、ピョンヤンから新しい作品が届き、11点をオンライン特設ページに追加で掲載することが出来た。

◎オンライントークイベント



平壤での活動に計6回同行し、日朝の子どもや大学生が交流する様子取材してきた共同通信ソウル支局の渡辺記者から韓国尹政権の外交戦略などをお話いただいた。

◎対面行事「ともだち展の日」



ウェスレー財団に後援いただき、東京・表参道にあるウェスレーセンターの会場の無償提供を受けた。当日は作品 79 点を展示した。



「あつまれ！ともだち展のなかまたち」では、ロサンゼルスで開催した絵画展の報告、ともだち展卒業生が、ともだち展を通じた交流の意義を再確認した。

2) 「東アジア大学生ピースフォーラム」の実施

2023 年度も東アジアの平和構築に関心を持つ若者の出会いと交流の場づくりをおこなった。ピョンヤン訪問は出来なかったが、8 月には 4 年ぶりに韓国訪問プログラムを実施し、また 3 月には韓国から若手を招聘し、2 度の交流の機会を持つことが出来た。

韓国訪問プログラム：江華島や臨津閣から南北分断の現状を目の当たりにしたり、北朝鮮について学ぶ大学院の学生たちと意見交換を行ったりと、多様な体験ができる機会とした。報告会で参加者が発

表した「印象に残ったこと」が見事に全員違う内容で、互いの意見に耳を傾ける学びあいも深まった。

(詳細は、別添の JVC 会報誌で特集記事を参照)

オープンセミナー：日本と同じ加害の歴史を持つドイツの戦後補償から学ぶことを目指したが、近年世界的な問題となっている歴史修正主義に話が及び、戦争加害の歴史に向き合う難しさを、アジアに限らない広い視点から考える機会となった。オープン開催だったため、「ともだち展」卒業生の在日コリアンやドイツ語を専攻している学生、高校生などフォーラム外からの参加もあった。

本事業に数年前から参加している大学院生は、「(これまでの) 勉強会では、朝鮮半島や東北アジアという地域と向き合ってきましたが、(今回はドイツ) 他地域の例も学ぶことによって、今まで学んできたこと、長年そして現在も問題となっている日韓朝間の歴史問題や政治的対立が、単に地域問題ではなく、ある意味 “普遍的” であり、それゆえの複雑性に気が付きました。」と、ドイツ語専攻の学生は、「初めて知ったこととしては、安倍晋三氏が歴史修正主義者であり国際的にもそう認識されていること、ドイツも日本とほぼ同時期まで戦争加害の歴史にきちんと向き合えていなかったことなどがあります。(略) 逆に日本にも状況改善の余地があることを意味しているのではないかと思います。」と、感想を残している。

フィールドワーク：新しい参加者に興味をもってもらえるよう、関東・関西のコリアタウン訪問を入門編とした。3 月の関西プログラムは、若者対話 (同時期に開催中だった大阪展の企画) への参加と京都フィールドワークを実施した。若者対話では、韓国からの参加者のほか、在日コリアン、アジアからの留学生など、多様な参加者と意見交換が行われた。また京都フィールドワークは、フォーラムに参加している京都の学生が企画立案して実施された。

公开发表会：まとめとなる発表会はできなかったが、4 月に関西プログラムの振り返りを韓国とも繋いでオンラインで実施し、参加できなかったフォーラム学生とも経験を共有した。

◎韓国訪問プログラム



オリニオックドムでは南北交流に関わる韓国の市民団体が現在直面する課題を聞いた。

臨津閣では南北分断を実感するなど、それぞれが平和について考えた。

◎オープンセミナー



内容は歴史修正主義の概念から、ドイツがこれらとどのように向き合ってきたのかに及び、「米国やヨーロッパの歴史や社会問題を交えたレクチャーが新鮮」という声もあった。

◎フィールドワーク

- ・東京（大久保エリア）



東京の一大ターミナル駅である新宿にも戦後の焼け野原で闇市が発生、西口周辺には今も名残が見られる。こうして新宿の知らない側面を知る参加者たち。

- ・大阪（生野コリアタウン）



在日コリアン集住地域の入口である JR 鶴橋駅がスタート地点。
生野出身の在日 2 世の安さんの体験談から、日本社会に今も残る差別を考えた。

- ・関西プログラム（大阪、京都）



ベトナムやミャンマーの留学生とディスカッションしたり、在日1世の方から直接お話を伺うなど、日本人だけでなく、韓国からの参加者にも貴重な機会となった。

◎オンライン報告会



参加者が学びを振り返り、参加できなかったメンバーとも経験共有するため大阪と東京、日本と韓国をつないだ報告会を実施した。

4. 活動の成果（成果物などがありましたらご紹介ください）

1) 多様なバックグラウンドを持つ参加者が集った大学生フォーラム

ポストコロナを意識し、フィールドワークや海外プログラムなど実際に参加できる場を積極的に設けた。人数のうえでは十分な成果をあげられなかったものの、入口としての大久保・鶴橋フィールドワーク、南北分断の現実や植民地支配の残滓を実地で学ぶ韓国訪問プログラム、そして日本・韓国・在日・中国朝鮮族の若者が集い意見を交わす関西企画という段階的な学びを積み重ねる流れができ、結果的に幅広い層の参加が可能となって議論も深まった。

特に3月の関西企画は、韓国から20代の参加者を招へいし、在日コリアンやアジアからの留学生など多様なバックグラウンドを持つ参加者の対話の場としたことで、それぞれが「対立ではなく平和を実現するために果たせる役割は何か」を持ち帰る意義深い時間となった。この場には11月の「ともだち展の日」に参加した日本人・在日コリアンの若手や、韓国からも「ともだち展」の参加経験を持つメンバーが参加していた。韓国の参加者からは「子ども時代に楽しく交流した経験を持つ者同士が、改めて自分たちが平和のために果たせる役割について話し合える年齢になったことが感慨深い」との感想が寄せられた。「ともだち展」のようなこれまでの活動で築いてきたネットワークの財産を生かしてプログラム実施する意義を再確認する機会となった。

また京都フィールドワークは、地元京都の学生が「在日朝鮮人について知ってほしい」「日本人・韓国人・在日コリアン、どんなバックグラウンドを持つ参加者にも学びになる場にしたい」と強い思いを持って企画運営を行い、学生主導のプログラム実施の可能性も見出すことができた。

2) 情勢が厳しいなかでの韓国との連携事業

コロナ禍を経て世界各地で往来が再開したものの、世界的には対立と分断が深刻化しており、東北アジア地域においても台湾海峡や朝鮮半島有事、米中対立の余波が及ぶのではという懸念が高まっている。

「南北コリアと日本のともだち展」(以下、ともだち展)は、地域包括的な取り組みとして長い蓄積を持ち、南北分断や日朝国交不在のなかにあっても隣人との繋がりを絶やさないことで、地域の安定や平和に寄与する方法を模索し、日・朝・韓・中、そして在日社会から一定の賛同を得てきたが、こうしたマルチラテラルな取り組みが非常に困難になってきている。特に南北対立の影響は大きく、例えば韓国の市民団体は自国の政策によりこれまで可能だった在日朝鮮人との公式な接触が事実上禁じられる状況が生まれた。

そうしたなかで韓国のパートナー団体・オリニオッケドムは、子どもの絵画を展示・紹介する方法を再評価して国内で積極的に実施すると同時に、海外 NGO や大学機関などとの連携を通じてアジア外での展示の機会をつくり、東北アジア地域で「戦争を起こさせない」ためのアドボカシーを海外からも進めている。これにともだち展も展示作品を提供して協力し、ロサンゼルスでの絵画展にも足を運んで、米側の実施主体となった American Friends Service Committee や ReconciliAsian など、北朝鮮支援の経験を持つ旧知の海外団体との関係も新たに築くことができた。こうしたネットワークとの情報・意見交換を通じて、亀裂を深めるのではなくどの国／地域にも参加が可能な対話の方法を追求していく今後の土台としたい。

3) 新たな参加者・協力者を増やす

上述のとおり地域の分断がむしろ加速化し、日本のなかでも新たな協力者を増やすことは容易ではなく、目標としていた「ともだち展の絵画を利用したアクティビティづくり」には着手できないまま、課題として残った。絵画教室やフリースクールなどに協力を働きかけていたものの実現にこぎつけられなかったが、協力者からの紹介により、趣旨にも賛同し絵画展示やアクティビティの機会を提供してくれそうな学童保育などに繋がりができた。

5. 今後の課題

上記でも触れたとおり、南北関係の悪化をはじめ東北アジア情勢が改善する見通しはつきづらく、2024 年度の活動も予定通りに遂行しにくくなる恐れもあるが、国家間の関係が厳しいときこそ、市民交流や市民同士の連帯活動が重要な意味を持つことを示していきたいと考えている。

課題として残っている「ともだち展の絵画を利用したアクティビティづくり」は、新しく繋がった学童保育などの運営者とともに実践を試行しながら、アクティビティを固め、共感者を増やすツールとして活用していく。KOREA こどもキャンペーンが過去に取り組んできた活動やその成果を伝えるツールもあわせて整備する。

大学生フォーラムでは、入門編フィールドワークには新しい学生が参加したが、留学などもあってその後の参加は減少し、年間を通した連続参加に結びつきにくい。後半のともだち展交流イベントや関西プログラムで5名の新しい参加者を得ることができたので、この学生が継続して参加するようにゴールを設定し、学生が関心を持てる魅力的な学習会や交流会、フィールドワークを行っていく。

またフォーラム卒業生や大学院生が、新たに参加する学生の関心を聞き出したり、学びをフォローする役割を果たせるような仕組みづくりも行なっていきたい。

貴財団助成からの繰越金 360,228 円を、上記の活動実施に活用させていただきたい。

以上